

# 大唐西域記研究 (2)

——烏丈那国の仏教を手がかりとして——

高 橋 堯 昭

## 序

私は何年前か前、この棲神で大唐西域記研究(一)を書いて七世紀初頭のインドに於ける大乘小乗兩教の分布図を考えてみた。そして仏教が通商路沿いに伝播し、面としてではなく線として広がって行ったことを知った。そして最後まで仏教が残ったところは通商の行われていた所であり、然も仏教の信者は主に商人階級であった。即ち商人はその商行為が民族人種を超えた普遍性を要請する故に、普遍を原理とする仏教が信仰されたことは当然のことと言える。然も仏教の華々しい隆盛にとかく見落しがちなことは、この仏教隆盛の時にもあの広大なインドではヒンズー教が農村の「閉ざされた社会構造」の原理として依然根強く存在していたという、このインド社会の二重性に注意する必要があると書いた。

然して一九七五年秋、スワット地方を尋ねる機会に恵まれ自ら仏跡をこの足で調査するに及んで、ガンダーラから中国への橋渡しをするこの重要な通商ルートの烏丈那国、即ちスワット地方でも、やはりその道路沿いの地に塔や僧

伽が作られたが、たとえ道路沿いであっても行き止りで通商路でない所はこれらが作られなかったことが実証され非常に楽しい旅であった。然も一九七六年これを再び確認の旅をもった。然してこの大唐西域記で問題となるのは、この玄奘の記と現存の遺跡とが合致しないことである。だから現地での感じとして果して玄奘がこのスワットの地に足をふみ入れたのであろうかとの疑問がわく。更に西域記の烏丈那国の項でジャータカ、即ち釈尊の前世物語が非常に多いのに注目される。これはこのスワット地方がガンダーラとマラカンドの山脈でわかれた山国で、白フンの迫害の影響も少く最後まで仏教が残り大乘が栄えていたことによると思われるが、何故に仏教がここに最後まで残り得たかも併せ考えたい。これが仏教の本質にふれる問題を呈するかも知れないから。

(1)

玄奘の烏丈那国の記事で特に目立つのは「一千四百の伽藍、既に荒蕪したとはいえ、昔は僧徒一万八千、今は漸減して少い。然も皆大乘を学ぶ」とある。特に注目すべき点は禁咒（ダラニ）を誦していたということだ。大唐西域記中にダラニを唱えていた所はここだけだから。これは明らかに大乘仏教であったことがわかる。法顯伝には「五百の伽藍皆小乗を学す」とあるから、この四世紀から七世紀の間のある時期に大乘に移っていたことがこれからわかる。

今少しく玄奘の記を紹介すれば、ブトカラと推定される忍辱仙の物語、醜羅山の半偈のために身を捨て、然も自分の悟りだけではなく、崖の岩や木にその羅刹の教えの半偈を書き後人の為に残して身を投じた利他の精神、或は正法を聞く為自らの骨をくだいて筆となし、皮をはいで紙となし流れる血潮を墨となして広く人々の為に教えを残そうとする摩訶伽藍の話。或はバラモンに乞われて布施せんとするに何物もない、そこで自らをしばらせて敵将にさし

出させて賞金にあずからしめたという摩訶伐那僧伽藍の極致の捨身の精神。又ポビュラーな鷹につかまったハトを救う為、自らの肉を切つて鷹にあたえた尸毘王の物語等、これらはプトカラや或は盗掘されて出て来た青いスワット特有の石の彫刻にその題材が多いのもこの物語が如何に多く語りつがれたかが知られよう。

又チャクダラで本流に合流する支流をさかのぼると次のような話のストゥーバがあったという。即ち飢えた民衆や流行病に悩む民を救う為大蛇となつて自らを食へさせる物語。又そのかたわらのストゥーバは大魚と化して人を救う物語。更に川沿いの崖の上にはストゥーバがあつて次の物語りをひめているとある、即ち昔孔雀王が熱暑の為人々が水がなくなつて困っているの、自らのクチバシで岩をつつき遂に水を出して人々を救つたが、自らは口ばしがこわれて死んで了う等々。

又都城から西四・五十里、五夜叉が食べものがなく動けなくなつてゐる時、自分の肉体を食へさせようとしたが夜叉は余りの飢えに動くことが出来ない。そこでバラのトゲで体をついて血を出し、それを吸させた上自らの肉体を食へさせたという物語等枚挙に遑まない。特にこのスワット地方は地質が赤く、夕日をあびて山も大地も真赤に映える荘嚴な光景に接し、この赤い土とこの流した血の物語との相関反映を興味深く感じたのである。

このような捨身の物語が語りつがれ、言いつがれて来たのは、逆にこの地にこのような利他の精神、大乘の教えがあふれていたことに外ならない。だから玄奘はこの地をめざしたのであらう。

(2)

このジャータカの記事を裏付けるものとしてA・スタイン氏の記録をかりよう、氏は前世紀の後期からこの地を何

回か探検し仏跡や彫刻の詳細を出版している。Serindia. Innermost Asia. Archaeological tour in uper Swat and adjacent Hill tracs. Alexander track. Archaeological geography of northern India.

これら書の中で、スタインは(イ)シャンカルダールの象の岩の下にロングゴートのズボン姿のグレートクシャンの支配者の姿をした像は菩薩の像と、(ロ)ゴクダラに仏像が何基も発見されているが、こわされて輪郭も定かでない像の中の何基かは菩薩像と。(ハ)ククライのシナシーストゥーパに菩薩像があり、これは観音像と、(ニ)シャホライの巨大な岩の摩崖仏の仏陀のそばの像は菩薩像と。(ホ)シャラライの岩に彫られた七八ヶの像は菩薩であり、特に観音像である。(ヘ)マングラワーの丘の岩に彫られた像も観音だとしている。(ト)更にもっとはつきりしているのはティラートの対岸、ジャールレのスワット川左岸の菩薩像は明らかに観音として菩薩の像に言及している。

このように数少なく残された摩崖像から菩薩特に観音と見られるのがあるのは「石窠堵波の西に大河を渡り三四十里にして一精舎に至る。中に阿嚩盧低湿伐羅菩薩の像あり、威靈潜被して神迹は照明なり、法俗相趨いて供養おとろえることなし」の大唐西域記の記事から観音信仰のさかんことを表わしていることと符合する。又盜堀されてこっそり売られているスワット特有の水色の像に観音とおぼしきものに数多く接するから、相当大乘仏教が栄えていたことがわかる。なぜなら観音こそ利他の大乘仏教の代表者であるからである。これからもっと盜堀が進めば多くの観音像を発見するに違いない。然しそれまでに無責任な盜堀で仏像が破壊散逸されることのないことを祈る。土地の人は深夜にカンテラをつけて堀っているのをよく見るから。

(3)

然して玄奘の烏丈那国の項について、今迄数多くの疑問が投げかけられて来た。即ち、(イ)烏丈那国の聖跡の巡礼の順序が不ぞろいで錯綜しているから実際は行っていないのではなからうかと。(ロ)記載されている記事がほとんど(1)で紹介したように伝説の紹介であつて実際の記事が少ないから。(ハ)当時のガンダーラの都である跋虜沙城(チャルサダ)からインダスの渡しである烏鐸迦漢茶城に至り、急に北上し烏丈那国に至り、又同じルートを烏鐸迦漢茶城にひきかえして、よりによってインダスバレーからスワットバレーの間の高い峠を越えて往復しなくとも、せめて帰りは当時のメインルート、即ちマルダンからジャマルガリー・タレリーの遺跡のそばを通り、サンガオ辺で山脈をこえスワットの谷を下つて *Blitkot* に通ずる本道をなせ逆の下つて来なかつたかの疑問がわく。だから烏丈那国の記事はすべて伝聞であつて実際には跋虜沙城から烏鐸迦漢茶で川を渡つて直ちに仏都咀叉始羅国、(タキシラ)に向つたのではなからうかという疑問である。

そこで私は一つの試論を試みてみた。即ち玄奘の記事中明らかに伝言と思われるものを(A)グループ、そして距離的にも内容的にも合致し、その記事も又くわしいものを(B)グループとして便宜上二つに分けて考えてみた。まず(A)グループに属するものとして、

a 阿波邏羅竜泉について「曹掲盤城北行、二百五十里入大山至阿波邏羅竜山即蘇婆伐窰堵河の源也」の文字は現在のスワット河の源泉についてであらうが、いかに足に自信のある玄奘にしても貴重な時間をこんな山奥に入ることが勿論ない。又

b 「有<sub>二</sub>如来足所履迹<sub>一</sub>」は竜泉の西南三十余里大磐石上とあるから、現在のスワットミュージアムにあるティラートの仏足跡を意味し又この仏足跡のあつた近くの

c 「如来灌衣石」も共に行っているとは思えない。更にスワットバレーからインダスバレーに入り、これをさかのぼって行くこと千余里。

d 「達麗羅川に至る。これ烏丈那国の旧都」だといっている所、更にそこからシンド川をさかのぼること「五百余里至鉢露羅國」とあるが、これなど法顯伝の「弥勒菩薩の木造」の記事からして法顯の陀歴国の伝聞に間違いないと思うからこの

e 「鉢露羅國」も中国国境のヒマラヤの中これ又伝聞で行っていないのは勿論である。更に今度は都城から南へ下って  
f 「醜羅山」についても非常に疑問がもたれる。

即ち「骨揭釐城南四百余里至醜羅山」とあの如来が半偈のために羅刹に身を投じた有名な話の因縁の地も里程が余りにもかけはなれている。即ち四百里というと百三十キロ、スワットとガンダーラを境する山脈はおろか、カプー  
ル河をこえてガンダーラの南方の砂漠の中に入ってしまった。すると烏丈那国の所で述べるいわれはなくなってしまう。一歩下って日本の山々の如く、山の里程は短かくなっていたり、つずら折れの道故地図上の距離の二倍三倍の里程があると考えてみても、このマラカンドの山々をこえてガンダーラの中へはみ出してしまった。従って玄奘はこの山に行かず伝聞をきき遠くから見て書いた程度であらう。

g 「城南二百余里大山側摩訶伐那伽藍」とあるが、これ又二百余里でも山脈を南に越えてしまった。従ってこの一切施王の遺跡も実に不正確である。

又「代鵠西北二百余里入三瑯羅闍川至薩婁殺地(唐言三蛇菓)僧伽藍」の

h 「薩婁殺地僧伽藍」

i 「蘇摩大窣堵波」

j 「孔雀王窣堵波、」これらも後述の如く代鵠をターナと仮定しても又他の遺跡を基点としても余りにも遠くチトラル方面になって了う。チトラル方面には無数のストウーバや僧院が道から少し奥まった所、即ち托鉢の行動範囲位の所に見出されるから、この辺の話かも知れない。

然してこれら④グループに対して比較的距離や記述が正しいのを⑤グループとすると、⑥グループに摩訶伐那伽藍の北西下<sup>レ</sup>山三四十里に

k 「摩偷伽藍、有窣堵波」とあり、又この「摩偷伽藍西六七十里至<sup>二</sup>窣堵波<sup>一</sup>尸毗王<sup>三</sup>」とあるがこの摩偷伽藍のもとなる摩訶伐那伽藍の位置が分らないから、私はここに試論をこころみる。即ち逆に考えることだ。即ちターナの遺跡から考えることだ。ここは

1 「尸毗迦王、為<sup>二</sup>求仏果<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>此割<sup>レ</sup>身從<sup>レ</sup>鷹代<sup>レ</sup>鵠」

の話の地と想像される。即ち「Thana を Dana (布施) の訛と仮定してみる。A・スタイン氏も現代のパキスタンの学者も同じ意見をもっている。その証拠にこのターナの部落のまわりには丘という丘、峰という峰にこわれた僧院が無数にある。特に中心の山あいにはトープダラーという大塔が残っていて、このターナは仏教の一大拠点、その規模からいってスワット最大の僧院社をなしているからよほどの理由ある因縁の地であったと考えていいと思う。だからターナ<sup>二</sup>ダーナ<sup>一</sup>、即ち布施<sup>二</sup>尸毗王<sup>一</sup>因縁の地として逆算して、玄奘の六七十里西を逆に東にするとゴクダラの遺跡にぴったりと合う。これはこのゴクダラが摩偷僧伽藍だとするスタイン氏の比定に合う。ここが正法を聞いて骨を折り筆となし、自らの血で自らの皮に書いた所ということになる。

このゴクダラ説には異論があり摩倫 Harsch は豈であるが、一説には mayukha (光明) の略でイラム山の西四十里 (八マイル) に mayan という聚落がある、これが mayu の訛となったとして足立博士は推量しているが、そうすると私のいうターナの遺跡と距離が合わなくなり、且つ又玄奘のいう距離の所に遺跡が見当たらない。従つて距離的にあいまいなので㊤グループに入ることになる。又距離的に最もびつたりなのが

m 「城西南行六七十里、大河有窳堵波高六十余尺上軍王之所建」とあるその距離の所にシャンカル大塔が道路のそばに厳然とそびえている。然も玄奘の記録と同じ仏舍利を積んだ象が石と化した伝説そのままに、岩の一部が象の頭部や鼻に非常に似た岩山もある。又同じように距離的にびつたりなのは

n 「都城から東四五里有大窳堵波忍辱仙の跡」という記事である。最近イタリヤ隊が発掘した大規模な寺院跡ブトカラがそれである。何回か増巾した中心塔のまわりには少くとも二百余の奉獻小塔が立ち並んでいる。僧院趾も一部発見されている。その遺跡の北西側にはギリシャローマ式の円柱に支えられた大きな入口が作られている。この門は相当数の信者が入れる位の規模だから、近くに大きな都があったことが想像され、逆にこれによって今迄考えられていた烏丈那国の都がマランゴールからミンゴラに断定された位である。だからこの遺跡が忍辱仙の遺跡として脚光をあびて来た。これ又B群の主たるものであろう。

o 「置揚蓋城西五十余里渡大河至盧醜咀迦 (唐言赤) 窳堵波、慈力於此刺身血以飼五葉叉」とあるがこれが距離的に見てスワット河の北岸パラライかその西のグンバットのストウバ群の一つであらう。これは川を渡らずにシャンカルダールの塔の川向うに望見出来る所にある。

p 「嘗揭蓋城東北三十余里、至過部多 (唐言奇特) 石窳堵波」とあるが、これが現在のチャルバー近くの石塔と比

定される。

このように分析して考えてみると、このA群とB群とは自ら法則性があるように思われる。即ちB群はスワット河沿いのメインルートに沿った遺跡であり、A群はこれからはなれてゐる遺跡群である。従つてB群のみ距離や記述の模様が合致してA群は合わないということは玄奘はこのメインルート沿いのB群は参詣したがA群はわけ入らず、従つて伝聞で書いたと想像される。こう考えると大唐西域記の混乱が解決されるような気がする。

(4)

然らば当時の通商路の中、メインルートはどのように通つていたのだろうか。

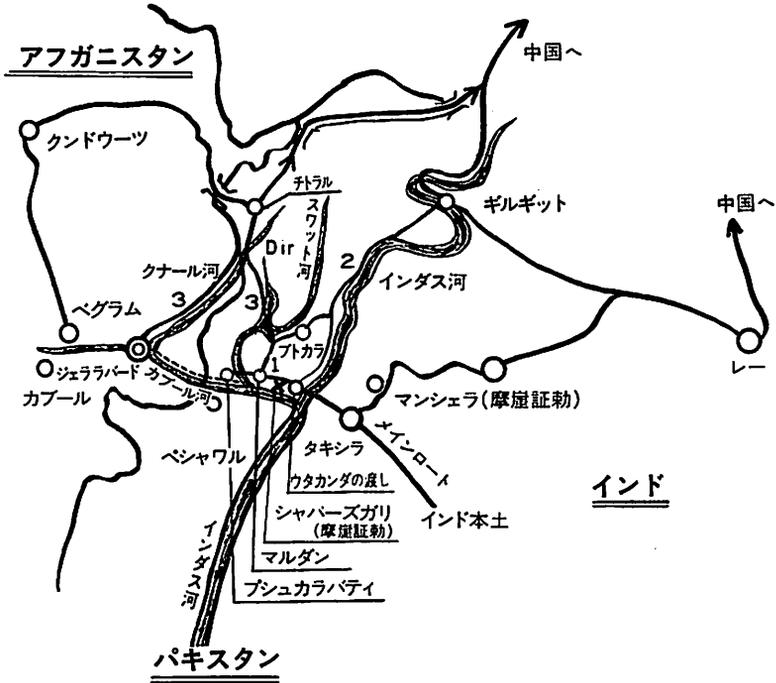
1、当時の最重要な道はマルダンでインドから来る道から別れ、ジャマルガリー、タレリーのそばを通つて北上し、サンガオでマラカンドの山脈を横切つてスワットに入り、谷を下つて *Biglow* でスワット川沿いのメインルートに結ばれ、2、3、と接続する。

2、ターナから北上したメインルートはミンゴラ北方のマランゴールから東へ向う道は又少し北のチャルバーからも東へ行く道はやがて一本の道になつて峠を越えてインダスバレーへ。

これを北上するとギルギット、フンザそして新疆チベットへ通ずる主要な通商路となり、南下すれば烏鐸迦漸茶からタキシラそしてインドへ通ずる主要道となる。

3、チャクダラからスワット本流に分れて支流にそつてさかのぼるとやがて *Dit* に至る。ここから西へ進んでクナール河を下るとアフガニスタンの通商の拠点、然も仏教の中心地ジェラバードに至る。この道は非常に重要な道

# 通商路 その1

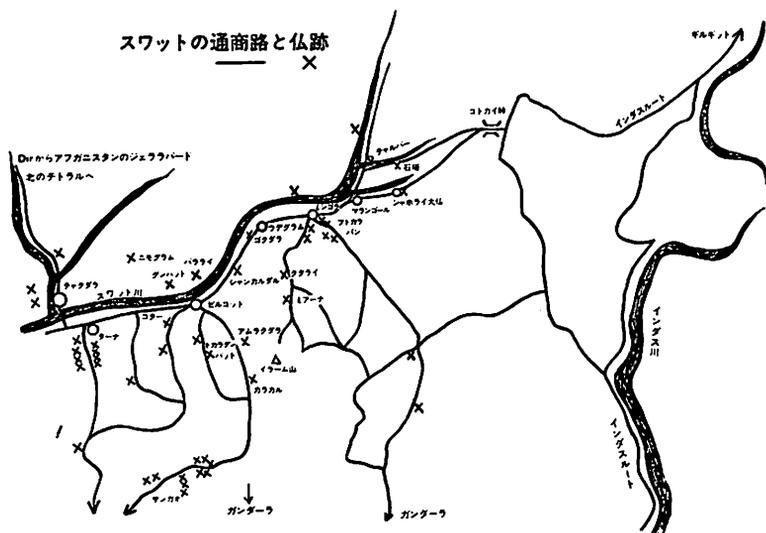


でアレキサンダー大王がスワットに入った道でもあり、又法顯と共にこのスワットに入った慧景道整慧達がこのルートからハツダやナガラハラに仏教を求めて入った道でもあり当時の最重要な道であった。当時ガンダーラからアフガニスタンに行く道はカブール川沿いの小さな道もあるにはあったがこの道が一番使われたようだ。現代使用している有名なカイバール峠など十五世紀という新しい時代のものだから。

4、更に Dir から北上するとチトラルに至る。チトラルからはバミールの中にふみ入りヤルカンド・コータンガジュガルに通ずる道が現代まで続いている。

更に現代は遊牧民が春秋の移動時使

う程度だが当時特にクシヤンの最盛期などには使われていたと思われる道がある。これは5、チトラルから Kokcha 或は Dorah の二つの峠をこえ谷を下りアフガニスタンのファイザバードからクンドウツに直接至る道だ。玄奘の安阻羅国↓閩悉多国↓活国という道だ。何分現在には使われていない道でも盛時は使われていたと私は考えたい。その例は、ギルギットからヒマラヤ越えの道だが、法顯伝に「順レ嶺西南行十五日、其道艱阻、崖岸峻絶……昔人有鑿レ石通レ路施ニ傍梯ニ者上……」とあるが、法顯より二十年後の法勇が通過した時には傍梯の杭さえ残り少くなり、更に百年後の宋雲は「鉄鎖為レ橋懸レ虚為レ渡 下不見底 旁無ニ挽掣ニ倏忽之間投軀万仞、是以行者望レ風謝レ路耳」とあるから、場所は違うがクシヤンの最盛期は通商も盛んで国力もあったからいろいろの整備も行われたであろうが、やがて白フン等の為国力がおとろえると従って通商もおとろえ道もどんどん荒廃して来るさまを示している。だからこのチトラルクンドウツルートも現在遊牧民だけが通る道





ざしたのかも知れない。先輩の法頭も法勇も宋雲も知敵もまず、このスワットに入り、然る後ガンダーラ、ハツダへ行つたし、又当時ブトカラやヒラ山がチベット人の聖地として巡礼が盛んであったから、玄奘はウドヤナ国に入らない筈はないと思う。その記述に混乱はあつても。特にA群の。

然してこの重要な通商ルート沿いにB群がある点が注目されていいと思う。即ちスワット川からインダスルートへの。だから玄奘はインダスの渡して仏都タキシラを目の前にして急にインダスルートにのつてスワット入りしたが、このメインルート沿いの寺だけ見て又インダスルートを下つてタキシラに入つて行つたといえよう。このルートは今も辺地の文明果てる所となっているが、当時は最重要なルートであつたと思われるからごく自然の行程であつたと推測される。然も興味あることはこの通商路沿いに仏跡が散在することである。即ち、

1のルート沿いにジャマールガリ、タレリ、シクリ・ババ、サンガオ、カシミールスマト、そしてスワットに入つてアムラクダーラ、トカーラグンパット等。更に途中から数本の谷伝いに下ると無数の仏跡がある。

2の道を東上するとシャホライの大仏。チャルバーの石塔を通過してインダスルートに合流すると数多くの遺跡やマウントが続く。この道の中心地ギルギットには最近巨大な摩崖仏が発見されている。勿論法華経のギルギット出土は有名である。

3のルートはやはり無数の塔等にデイルからチトラルの間では岡のふところに塔や僧院跡が無数に見られる。従つて仏教はここでも通商路沿いに発展して行つたことを証している。これに反し行き止りのこのスワット本流沿いの道はインダスルートと別れた上流は仏跡は数える程しかなく、せいぜいティラートの仏足石が北限であり且つ主要なものとなつてにすぎない。これも仏教と通商路との特殊な関係を示しているのではなからうか。

かく通商路沿いに仏教が栄えていたことは今迄何度も書いたが、このスワットでもその通りであった、特に大乘仏教が。然してこの大乘中何の教典が流布していたかは資料のない現在、まして浅学の私に判断出来る筈はない。然し又私はここで一つの試論を試みる。大方の非難も予想しながら。

この大唐西域記中非常に興味のある資料が目につく。それは「曹掲罽城の東北三十余里にして遇部多 (Adbhuta) (唐に奇特という) 石窠堵波に至る。高さ四十余尺、在昔如来は諸の人天の為に法を説いて開導せり、如来去りて後地より踊出す。黎庶は恭敬して香華替えず」とある。大地より踊出せる石ストゥーパ、ここが問題だと私は思う。そこで玄奘が大唐西域記全巻に於て窠堵波がどのような表現であったかをしらべて見た。すると何百ヶ所いうストゥーパに関し「僧伽の外に窠堵波あり、無憂王の建つる所のものなり、如来在昔ここで法を説きし所なり」というような表現をもって語られているのが普通であつて、「大地から涌出」というような特別な記述をしていたのは、たった一つこだけであることが分つた。だからよほどの印象を玄奘がもたれたのではあるまいか。

法華経では「大地から塔が涌現し、その中に多宝如来が居られ、釈尊を手まねきして半座を分つた。為に二尊が並坐された塔は空中にかかった」ということがその思想の重大な展開の意味を担っている。だから私はこのような言い伝えがあつたのは或はこの法華経の思想があつたからではなかるうかと試論してみた。その最大の根拠はこのインダスルートという最重要のルートがこの石塔の前を通つてゐることである。この道はギルギットに通じてゐる。ギルギットからは法華経が発見されてゐる。大乘仏教はガンダーラで発展したといわれているから、この思想は中関チベツ

トに伝播するにはこのルートを通らない筈はないからである。

同じことが法華経のカシミール本の発見されたスリナガルと重要な通商路で結ばれている仏教の拠点たるタキシラで興味あるものを見たことを前号で書いた。この道が如何に重要かを示すものとしてこのルートのマンシエラにアソカ王の摩崖証勅がある。インドからアフガニスタンのシルクロードへの主要道に沿った所にシャバーズガリの摩崖証勅があるように、アソカ王は重要な道のそばに証勅を彫らせた。その証勅がある位だからタキシラ、カシミールの道の重要さが理解されよう。然もこのルートはこの仏教時代のみでなく、有史以前にもさかのぼる大切な道でもあった。

最近バキスタン考古学局の調査で重要な証拠が発見された。即ち西紀前三千年の大昔北シナで流布した或種の模様の陶器が、今迄スリナガルで沢山発見されていたが、この陶器がタキシラのアソカ王時代の町ビルマウントのすぐそば Sarikholia で発掘された。これによって有史前にタキシラと中国がスリナガルを介してヒマラヤ越えでつながっていたことが分った。従ってタキシラとスリナガルルートはこの時代から使われていた大事なルートであったと。

この主要道で結ばれたタキシラのモラモラドウで三対の「二仏並座」があることは前号で示した。然もマーシャルの発掘記録によれば未だ数々の「二仏」の存在が推定されるし、台座やストッコの破片もあった。一つの僧院で七八対もの二仏が存したことは何かしら意識的に作ったとしか考えられない。仏像の一仏とか三仏とかは広間の広さという物理的な条件で作られるものと違って思想の、意識の表現であるからこの二仏は自覚的に作ったに違いない。又これと同じものがダルマラージカの大塔のまわりのP1とP2の間にもある。これは両側に一仏ずつを加えてジャウリヤンの如く四仏であったと想像出来ないこともない、発掘当時これは両側がこわれていたから。然し両側に各一仏を加えれば、一方の方がつまって了ってP1とP2はくっついて了う。だから二仏であったと考えたい。

更にハツダ発掘の先駆者仏人 *Robinson* がハツダ出土のタバ・カラーンの報告書に二仏が何対も復元され、又カピシンのショトラク塔の最下段に二仏が推定されるから、二仏はタキシラとカプールの間に普及散在していたと想像される。然して二仏は現在の所、法華経以外に表現されていないと思われるから、もしこれが法華経のものとするれば、法華経はこの範囲に広がっていたと私は考える。然もこれらの仏像はすべてストッコ。ストッコの仏像は四・五世紀にかけて作られているから、法華経の成立後のものであり、法華経のものであっても不自然ではない。

従つてこの石塔も、二仏並座も法華経の発見された場所と遠くはなれてはいても、これが通商路で結ばれている点  
が共通に注目されていいと思う。だから法華経の思想はこの通商路の上を通つて行つたと思われるからその距離に關係なく案外密接な関連をもつていたのではなからうか。



以上通商路の上からこの烏丈那国の遺跡を考えて来ると、玄奘はその記述の不整合からこの国への来訪が疑問視されるむきもあるがその大乘仏教の栄えたこの国に出来ない筈はないしその記述の不合理性はA群B群と仏跡を分け、通商路沿いのB群を尋ねたと解釈すれば解消すると私は考えた。

ガンダーラからサンガオ辺で山脈をこえ、スワット側に入ると、無数に下る谷。この谷にそつて散在するこれ又無数の遺跡、如何に仏教が通商ルート沿いに展開して行つたかの模型を見るようだ。

通商路沿いに発展したのは勿論商人の援助による。インド西南部の窟院にほられた銘文によれば仏教と商人の關係が如何に密接なものであつたかが分る。共に「開かれた世界」を志向していたからだ。然しそれが仏教の強さであると同時に又弱さでもあつた。商人やインテリは盛衰のはげしいもの、根が弱いもの。丁度チベットに中共軍が侵入す

るや僧や商人や上流階級は競っていち早くインド、ネパールに逃げ出したが、民衆や農民は逃げ出すことが出来ず、回教の侵入後も農民はじっとヒンズーの教えをもち続けたあのたくましさはに缺けていた。

更に「開かれた世界」「普遍」を原理とする仏教は又商業交易のルートがとだえてもとの「閉ざされた世界」に帰って行くと商人達は霧散する。これに支えられた仏教もなくなってしまうことがこのスワットでも分る。然し、このスワットに最後まで仏教が残ったことは、同じくカシミールに七世紀半ばまで造像の意欲があったことと規を一にするが、共に山国で天然の要害であったというだけではなく、ガンダーラがローマ等へのシルクロード交易がおとろえ仏教も従っておとろえて行ったのと对象的にインダスギルギットフンザを介してヒマラヤ越えの交易路が共に細々ながら続いてきたからで、この通商路の存続が仏教の存続の基盤となっていたことに注目しなければならない。なぜなら、仏教は「開かれた世界」を志向する普遍性を基盤とする宗教だからである。

#### 参考文献

大唐西域記、慈恩寺法師伝、法顕伝

前記スタイン氏の諸著作

高田氏仏像の起源等。

その他ラホール博物館長ダル博士、パキスタン考古局ムガール博士及びハリム氏のセッションに負う所大である。